

# 醍醐古墳群発掘調査概報

昭和60年度

京 都 市 文 化 観 光 局

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

## 序

多数の文化財と優れた伝統文化の継承に幾多の労をついやしている歴史都市「京都」は、より活力ある豊かな近代都市建設にむかって発展の取り組みを強めているところであり、更に平安建都1200年の歴史的節目を8年後に迎えようとしております。

この平安建都1200年記念事業並びに21世紀の理想のまちづくり計画は、都市の優れた伝統のうえに新しい創造を加えるもので、市民が一体となって取り組んでいるところです。

しかしながら、まちづくりの基幹としての「都市建設事業」は、歴史的文化遺産の保存と継承に大きな影響を与えるもので、本市では埋蔵文化財の保存については、市民の理解と協力を得て行っており、また保存し難い遺跡の調査についても市民の協力を得ているものです。

この調査概報は、昭和60年度国庫補助事業として実施した発掘調査の概要をまとめたものであり、本書が埋蔵文化財の研究に、また有用な資料としてご活用いただければ幸いです。

本調査の実施にあたり調査を受託された財団法人京都市埋蔵文化財研究所、及び御指導いただいた関係各位、並びに市民のみなさまに心から感謝の意を表します。

昭和61年3月

京都市文化観光局

## 例 言

1. 本書は、京都市文化観光局が財団法人京都市埋蔵文化財研究所に依頼した、文化庁国庫補助による昭和59・60年度の醍醐古墳群発掘調査概要である。
2. 調査地の所在は、京都市伏見区醍醐内ヶ井戸町地内である。
3. 発掘調査の担当者と調査参加者は以下の通りである。  
調査員 木下保明・丸川義広・牛嶋 茂 (写真)  
補助員 東洋一・ト田健司・夏原三郎・能芝勉・藤野彦之・牟田嘉孝・山田米蔵
4. 本書の作成は木下が行い、写真撮影は牛嶋が担当した。
5. 本書に使用した方位・座標は、新平面直角座標系Ⅵによる。
6. 標高はT.P. (東京湾平均海面高度) を用いた。
7. 本書に使用した地図は、京都市都市計画局発行の2500分の1の地図 (勤修寺・行者ヶ森) と3万分の1の地図を調整使用した。

# 本文目次

第1章	調査経過	1
1	調査に至る経緯	1
2	調査地の位置と環境	2
3	調査の経過	2
第2章	古墳の調査概要	3
1	古墳群の構成	3
2	醍醐3号墳	3
3	醍醐4号墳	4
4	醍醐8号墳	4
5	醍醐9号墳	6
6	醍醐10号墳	7
7	醍醐11号墳	9
8	醍醐12号墳	13
9	醍醐13号墳	15
10	醍醐15号墳	16
11	醍醐16号墳	16
12	醍醐17号墳	17
13	醍醐18号墳	18
14	醍醐19号墳	18
15	醍醐20号墳	19
第3章	まとめ	20

## 図 版 目 次

- 図版 1 遺跡 1. 醍醐古墳群分布図 (1:2500)  
2. 西扯張区地形測量図 (1:250)
- 図版 2 遺跡 地形測量図 (1:250)
- 図版 3 遺跡 調査地遠景 (南より)
- 図版 4 遺跡 1. 調査地遠景 (東より)  
2. 西扯張区全景 (北東より)
- 図版 5 遺構 1. 3号墳全景 (南東より)  
2. 4号墳全景 (南より)
- 図版 6 遺構 1. 8号墳全景 (西より)  
2. 9号墳全景 (南より)
- 図版 7 遺構 1. 10号墳全景 (南より)  
2. 11号墳全景 (南西より)
- 図版 8 遺構 1. 12号墳全景 (南より)  
2. 13号墳全景 (南西より)
- 図版 9 遺構 1. 17号墳全景 (南より)  
2. 20号墳全景 (南より)
- 図版 10 遺構 1. 15号墳全景 (南東より)  
2. 16号墳全景 (南より)  
3. 18号墳全景 (南より)  
4. 19号墳全景 (北東より)
- 図版 11 遺物 8号墳出土土器
- 図版 12 遺物 10号墳出土土器
- 図版 13 遺物 11号墳出土土器
- 図版 14 遺物 12号墳出土土器
- 図版 15 遺物 4号墳出土土器 (1・2)、9号墳出土土器 (20~22)  
13号墳出土土器 (69)、17号墳出土土器 (71)  
20号墳出土土器 (74)

- 図版 16 遺物
1. 金環 (1~4・6~8)・銀環 (5・9~20) : 4号墳 (4)  
10号墳 (2・3・12)、11号墳 (10・11・14・16)  
12号墳 (5・9・19・20)、17号墳 (1・6~8・13・15)  
19号墳 (17・18)
  2. 鉄製品 : 8号墳 (10)、10号墳 (16~19)、11号墳 (1~8・20)  
17号墳 (9・11~15)

## 插图目次

图 1	調查地位位置图 (1:30000) .....	1
图 2	3号墳石室実測图 .....	3
图 3	4号墳出土土器 .....	4
图 4	8号墳石室実測图 .....	5
图 5	8号墳出土土器 .....	5
图 6	9号墳石室実測图 .....	6
图 7	9号墳出土土器 .....	7
图 8	10号墳石室実測图 .....	8
图 9	10号墳出土土器 .....	9
图 10	11号墳石室実測图 .....	10
图 11	11号墳出土土器 .....	11
图 12	12号墳石室実測图 .....	12
图 13	12号墳出土土器 .....	13
图 14	13号墳石室実測图 .....	14
图 15	13号墳出土土器 .....	15
图 16	15号墳石室実測图 .....	16
图 17	16号墳石室実測图 .....	16
图 18	17号墳出土土器 .....	17
图 19	18号墳石室実測图 .....	18
图 20	19号墳石室実測图 .....	18
图 21	20号墳出土土器 .....	19
图 22	20号墳石室実測图 .....	19

## 表目次

表 1	調查古墳一覽表 .....	21
表 2	土器 (須惠器) 觀察表 .....	22

# 第1章 調査経過

## 1 調査に至る経緯

醍醐耳塚古墳（1号墳）を中心に営まれた醍醐古墳群は周辺の開発に伴い、古墳群の一部が埋められたりして、十分な記録が採られないまま破壊されてしまうのではないかと危惧された。そのため今回国庫補助事業として発掘調査を実施することになった。調査は昭和59年度・60年度の二年度にわたって行った。



図1 調査地位置図 (1:30000)



## 2 調査地の位置と環境

醍醐古墳群は、北が広く南がすばまった逆三角形を呈する山科盆地の南端で山城盆地へとつながる地点に、醍醐山地の高塚山西麓から突き出した舌状の台地の南東の斜面に営まれている。したがって、古墳群からの眺望も山科盆地よりも小栗栖・六地藏方面にひらけている。また好天の日には葛城・生駒山脈を遠望することができる。

山科盆地における古墳時代後期の古墳（群）として、盆地北西部の東山丘陵上に営まれた旭山古墳群、盆地中央部やや南よりの中臣十三塚古墳群、そして今回調査した盆地南東部に位置する醍醐古墳群がある。また、醍醐古墳群北方約300mには向山古墳、同方向約500mには、大宅古墳が存在する。向山古墳は一部を残して破壊されたが、横穴式石室を内部主体とする径約17mの円墳であった。大宅古墳は両袖の横穴式石室を内部主体とする径約13mの円墳で、1958年の発掘調査により須恵器・金環・人骨片などの出土品があり7世紀前半頃の古墳と考えられた。同時代の集落跡としては中臣遺跡があるが、醍醐古墳群から視界の広がる小栗栖・六地藏の地では今のところ集落跡は発見されていない。白鳳時代の寺院である大宅院寺が醍醐古墳群の北側に、小野院寺が南側にある。

## 3 調査の経過

調査の対象となった古墳は醍醐耳塚古墳と東半の5～7号墳、そしてすでに調査を終了している2・14号墳を除く8基であったが調査を進めていく過程であらたに6基の古墳の存在を明らかにすることができた。

調査時の古墳群は竹藪の中にあり土砂置場としても利用されていたため、まづ竹の伐採とパワーショベルによる土砂の排除から始めた。次に表土をはがきないと検出できない遺構の存在が考えられたために調査区全域をベタ掘りした。個別の古墳の調査は東辺のものより始め、最後に西端の13・20号墳付近を西拡張区として調査を終了した。古墳調査の手順は、まづ周溝の検出と掘り下げから始め、石室内の掘り下げ、石室の平面・立面図の作成・写真撮影、掘形と封土の状態を調べるためにトレンチの設置の順に行った。

地形測量は西拡張区を除いてすでに調査前のものはすませてあったので、調査後のものについて実施した。また、調査地の全景写真撮影は気球を用いて行った。

## 第2章 古墳の調査概要

### 1 古墳群の構成

醍醐山地から突き出した舌状台地の南東斜面、東西約150m・南北約50mの範囲に20基の古墳が営まれている。東端の14号墳、西端の13・20号墳、そして台地上の比較的平坦な部分に築かれた1（醍醐耳塚古墳）・2号墳を除く15基の古墳が密集した形で立地している。この15基を小支群に分けることは容易ではないが、墳丘・石室の傾き、接近の度合によって5つの小支群に分けることができる。5～7号墳、3・8・9・18号墳、4・15・16号墳、10・11・19号墳、12・17号墳の5群であり、古墳群全体では8つの小支群から成り立つことになる。また、斜面の上段と下段に分ければ、上段には小石室のみが築かれている。

### 2 醍醐3号墳

墳丘 封土はほとんど現存せず、周溝によって墳丘の規模と形状が知られる。周溝は鏡形で墳丘は方形を呈している。後方の周溝は北東から南西に走る等高線と平行につくられ、それに直角に短い溝が両側に掘られている。東西幅は約8.7m、南北の平坦面は約5mで東西に長い長方形を呈する。

内部主体 南方に開口する小石室を内部主体とする。基底石は横口横積みにし、二段目からは小口横積みと横口縦積みを併用して積みあげていく。奥壁にはこの石室では比較的大形の石を2個鏡石とし据え付けている。開口部は1石にて閉塞されている。

遺物 1点も出土していない。

小結 通常小石室を内部主体とする古墳は、顕著な墳丘・周溝をもたないが、本墳は前方を除く3方に周溝を掘り、東西約8.7m・南北約5mという大きな墓域を有しており注目される。

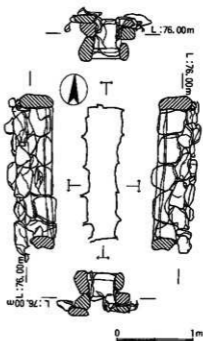


図2 醍醐3号墳石室実測図

### 3 醍醐4号墳

墳丘・内部主体 削平が著しく墳丘・周溝とも検出できず。また、内部主体も完全に破壊されており、掘形・石の抜き取り穴などは検出できなかった。

遺物 石室の破壊壤から須恵器の有蓋高杯のセットと金環が1個検出された。

小結 完全な破壊墳のため、墳丘の規模・形状、内部主体の種類は不明である。

### 4 醍醐8号墳

墳丘 後方と両側に周溝をめぐる方墳である。比較的急な北東から南西にかけての傾きをもつ斜面に築かれているために、後方を等高線に沿って溝を掘りそれにほぼ直角に短い溝を両側に付けることによって方形の区画を得ている。また、それ程封土を盛らなくても急斜面に造られているため、斜面下より墳丘を望むとかなり高く見える。

内部主体 南方に開口する無袖の横穴式石室である。前方を用水路に削平されているため本来はもう少し長かったと思われる。石室の基底石は大きめの石を横口縦積みにし、二段目以上は小口横積み・横口横積みを併用して4～6段積んでいる。また、斜面上部からの土圧を受けているため東壁は直立してしまっているが、本来は持ち送り気味に内傾していたものと思われる。石室床面に平たい割石が全域に敷かれ、そして奥壁から約2.6mの地点で大きめの石6個で閉塞されている。

遺物 遺物は石室の前半部に集中して出土した。奥壁に近い方に杯身(3～5)・杯蓋(6～8)、閉塞石側に台付長頸壺(12)・無頸壺(10)・長頸壺(13)・高杯(11)が出土している。また、鉄鎌が1点出土している。短頸壺(9)は墳丘東南裾部から出土している。

小結 石室が荒された痕跡がなく、出土遺物は完形でほとんど原位置を保っていると考えられるが、それらの遺物がすべて石室の開口部に集中し、奥壁との間約1.4mからは出土していない。この現象は、この空間地に死者が葬られたからだと思われる。ただし、木棺に収められていたなら鉄釘が出土するはずであるが、1点も出土しなかったのは木棺を使用しない葬法がとられたものと思われる。

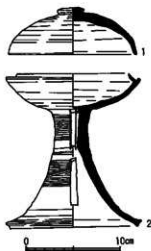


図3 4号墳出土土器

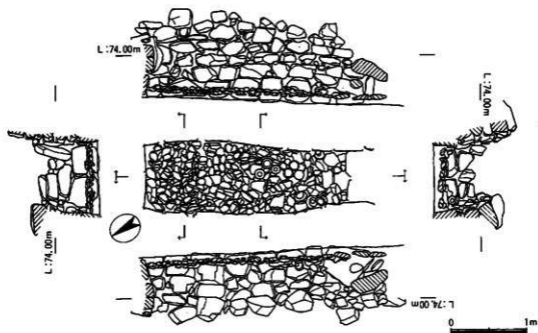


图4 8号填石室实测图

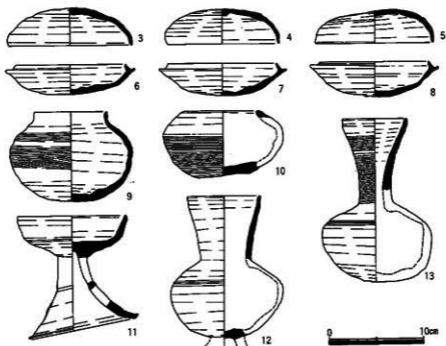


图5 8号填出土器实测图

## 5 醍醐9号墳

墳丘 後方と両側に周溝がめぐる方形墳である。後方の溝は等高線に沿って、両側の溝はそれに直角に短く取り付く。

内部主体 南に開口した狭長な無袖の横穴式石室である。奥壁と西壁の一部が用水路掘削時に破壊されている。石材が比較的良好に残っている部分では5～6段を数える。基底石は横口縦積み、西壁の開口部の石と奥壁の鏡石は小口縦積み、二段目より上は横口横積みと小口横積みを併用して築いている。東壁は大きさの揃った石を整然と積んでいるが西壁は石材の大きさも不揃いで乱雑な積み方をしていいる。床面は奥壁部分が削平を受けているが、石室中央部奥壁よりの地点に棺台として使用されたと思われる平坦

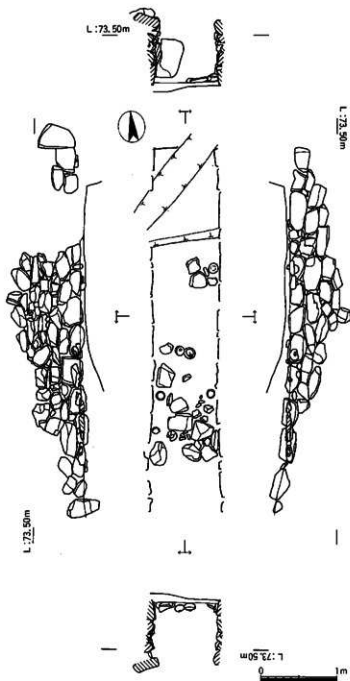


図6 9号墳石室実測図

な石数個と、開口部近くでは閉塞石と思われる石群が検出されている。

遺物 石室の床面から8点、石室内埋土から1点の計9点の須恵器が出土している。棺台と思われる石と東壁の間に短頸壺(20)、石室の中央やや開口部よりの所で2個の平瓶(21・22)が出土している。また、閉塞石の北側では杯身2個(16・17)南側では杯身(19)・杯蓋が2個(14・15)が検出され、杯身(18)は石室内の埋土中より出土した。

小結 墳丘の傾きと石室の主軸方向が約45°ずれている。これ

は、墳丘が狭くて急な斜面に築かれているため、狭長な石室を墳丘内に収めようとすれば墳丘で一番長いところ、すなわち対角線上しかないからだと思われる。

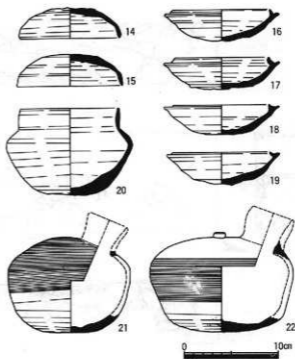


図7 9号墳出土器

## 6 醍醐10号墳

墳丘 前方を除く3方に周溝がめぐる方形墳である。東側の周溝が短いのは、墳丘の東辺がかなり急傾斜であるから、周溝で短く尾根を切断するだけで直線的なラインを得られるからだと思われる。

内部主体 南に開口した片袖の横穴式石室である。石室の開口部と上半石材は持ち去られている。袖石は奥壁から約2.5mの所にあり、比較的小形で西側壁より約22cm突き出している。奥壁は幅約70cm・高さ約80cmの石を2石小口縦積みになっている。東側壁の基底石の奥壁と袖石に接する2石は小口縦積み、残りの基底石と西側壁の基底石は横口縦積みになっている。二段目より上は、横口横積み・小口横積みを用いて構築している。石室床面には棺台として使用されたとと思われる平坦な石が分布する。

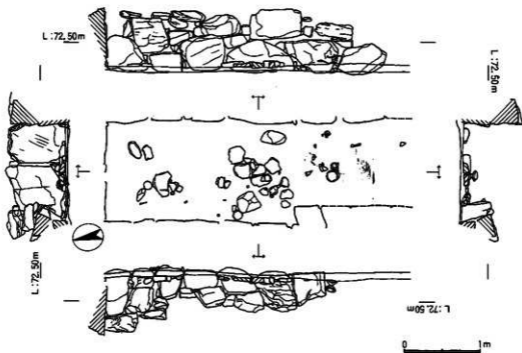


図8 10号墳石室実測図

遺物 玄室奥壁部に須恵器平瓶(37)・銀環、玄室部中央で須恵器杯身(26・28)・金環、玄門部棺台石の付近で提瓶(36)・金環が出土している。また、西壁に平行に鉄釘が3本ほぼ間隔を等しくして直線的に出土している。羨道部の玄門よりの地点で無蓋高杯(33)と有蓋高杯(34)が出土し、有蓋高杯は立ったままの状態出土した。他の遺物は石室開口部埋土中より杯身(27)・杯蓋(23・24)・高杯の蓋(25)・無蓋高杯(29)・有蓋高杯(30~32・35)、墳丘南東裾部より須恵器の甕(38)が出土している。

小結 棺台として使用されたとされる石の分布が、玄室中央部で、幅約75cm・長さ約2mの範囲に集中していること、その石群の西辺に沿って棺に使用されたとされる鉄釘が3本ほぼ直線的に出土していることなどから、石室主軸方向に木棺が1棺埋葬されたものと思われる。

7世紀の後半に再利用されたとし、玄室の玄門部よりの地点と羨道部から内底面にラセン、体部内面に2段の放射状の暗文を持つ土師器の杯が2個出土している。

## 7 醍醐11号墳

墳丘 西・北・東の3方を溝で区切られた方形を呈す。溝は連続したものではなく北東・北西で途切れている。西側の周溝は17号墳と、東の周溝は10号墳と共有している。

内部主体 石室の石材がかなり持ち出されており、奥壁部と玄門部から羨道部にかけての基底石が検出されたにすぎないが、内部主体は南に開口した両袖の横穴式石室と考えられる。西側壁には明らかに袖部が認められ、袖石は幅55cm、高さ70cmの大形石を小口縦積みにして用いられている。東側壁では玄室部の石材は抜き取られてしまっているが、西

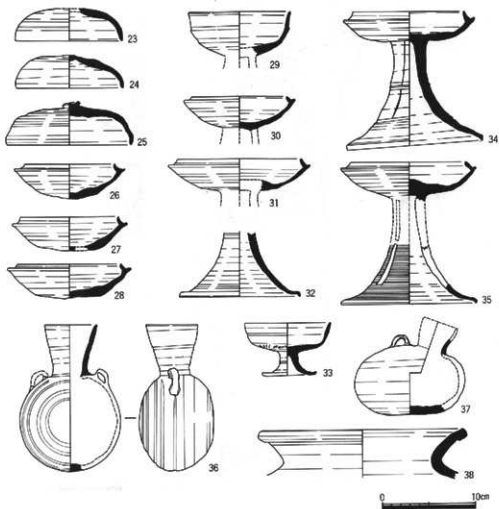


図9 10号墳出土土器



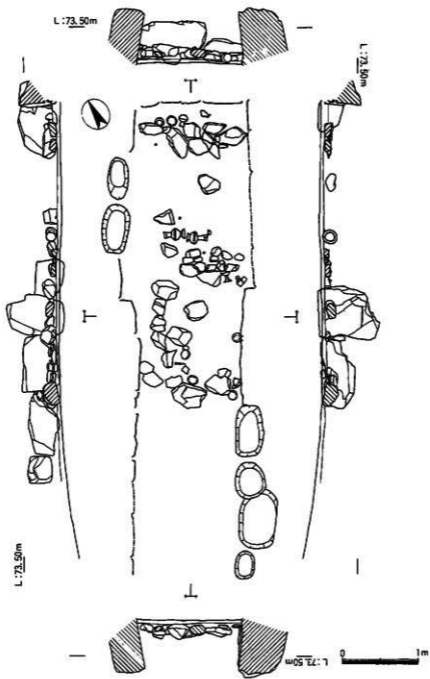


图10 11号墓石室实测图

側壁の袖石に対応する位置に幅70cm・高さ80cmの石が小口縦積みに用いられており、他の基底石が横口縦積みにされていることから明らかに石材の使用法が異っておりこの石も袖石として用いられたものと思われる。また、この石材の石室側のラインが同じ東壁の奥壁と接した石のそれよりも約15cm内へ入っており、この数字は西側壁の袖の出と一致する。

玄室部には棺台と思われる敷石施設がある。奥壁部には比較的大形の割石を敷き、玄門

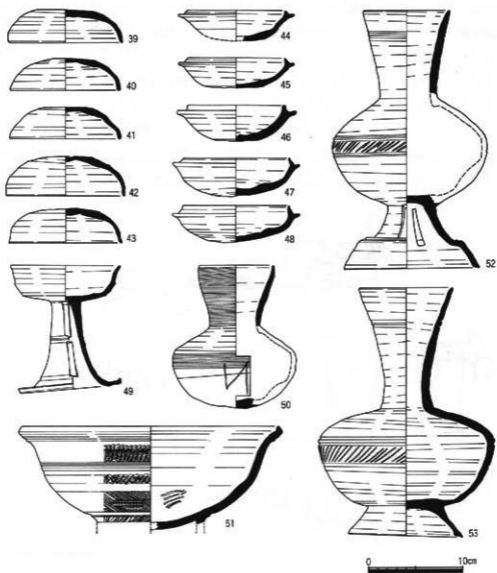


図11 11号墳出土土器

部には小形の石を敷いている。羨道部にも石群があるが、乱雑であったり床面より高くなっていたりして石室築造当初の施設ではないと思われる。

遺物 玄室奥壁部西半の棺台のすぐ北側で須恵器杯身、蓋 (39・47)・長頸壺 (50)・銀環 2個が出土。玄室中央部南よりの地点で互いに外方に向けて倒れている2個の台付長頸壺 (52・53)と銀環が2個、羨道部側棺台のすぐ南で須恵器高杯 (49) が出土している。羨道部では、玄室よりの地点で須恵器杯蓋 (41・43)・杯身 (44) が、東側壁沿いに須恵器杯蓋 (40・42)・杯身 (45) が出土している。また、羨道開口部で須恵器杯身2個と鉄釘9本・鉄製鑷先が検出されているが、土器の型式や出土レベルが床面よりかなり高いなどからみて古墳築造当初のものではなく、7世紀後半に再利用された時のものと思われる。他に石室内埋土より須恵器器台 (51)・杯身 (46・48) が出土している。

小結 石室内に棺台と思われる石群が何か所かみられるが、石が整然とならべられて天端のレベルが揃っているのは玄室部に限られている。土器の出土状態などを合わせて考えると玄室部に石室主軸方向に二棺並んで埋葬されていたと思われる。

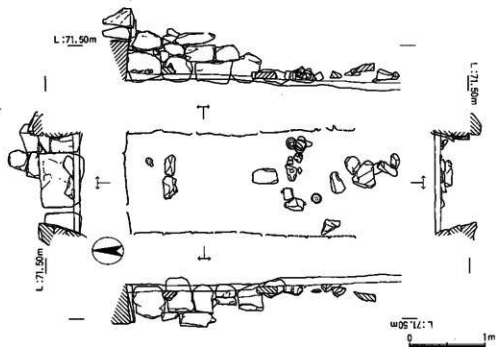


図12 12号墳石室実測図

## 8 醍醐12号墳

墳丘 前方を除く3方に周溝がめぐる、多少不整形ではあるが、方形墳である。

内部主体 石室前面が破壊を受けているが、南へ開口する無袖の横穴式石室だと思われる。石室の上半は削平されてしまっており残りのよい所で3段である。奥壁は幅約70cm・高さ約55cmの大きな石をまん中にして3石を基底石として横口縦積してある。東側壁の基底石は奥壁より4石が横口縦積み、開口部の2石が横口横積みで、西側壁は奥壁から4

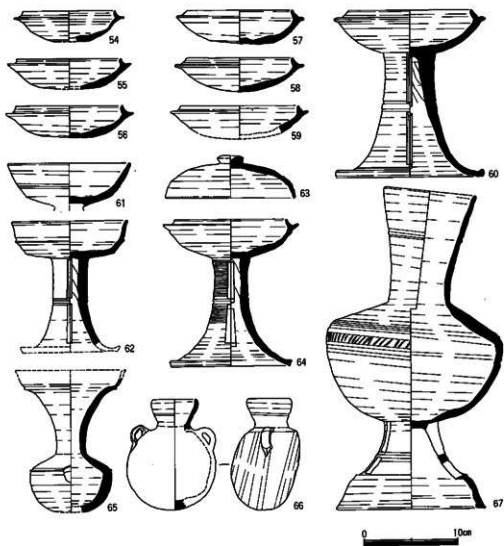


図13 12号墳出土土器

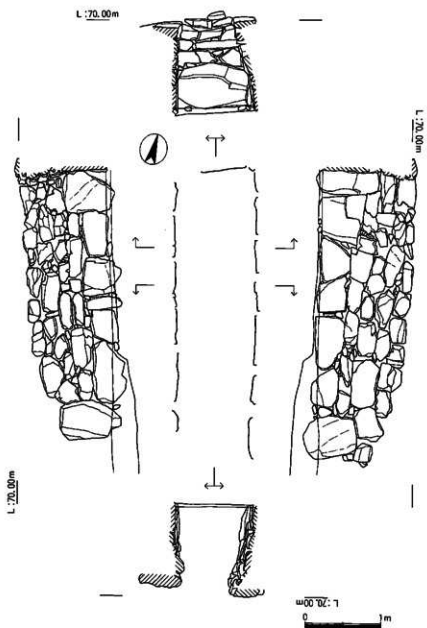


图14 13号墳石室実測図

石目と6石目の基底石が横口縦積み、他の石は小口縦積みになっている。床面には棺台になると思われる石が奥壁側に2石、開口部側で4石検出されている。

遺物 奥壁沿いで須恵器提瓶(66)が、奥壁側棺台の西側の石付近で銀環2個が出土している。開口部側棺付近では須恵器台付長頸壺(67)・高杯蓋(63)・無蓋高杯(61)・杯身(57・59)・銀環2個が出土している。他に北側周溝内から須恵器有蓋高杯(60・62・64)が、墳丘北西裾部から須恵器杯身(55・56・58)、墳丘南東裾部から須恵器杯身(54)・取土(65)が出土している。

小結 比較的緩やかな斜面に築かれているため、墳丘の傾きと石室の主軸方向はほぼ平行で両側の溝も他の古墳に比べて長い。17号墳と同一小支群を形成する。

## 9 醍醐13号墳

墳丘 前方を除く3方に周溝がめぐる方形墳である。東群の古墳と比較して両側の溝が長く、墳丘の傾きと石室主軸方向がほぼ等しいのは、緩傾斜地に造られているためである。封土はほとんど残っていない。

内部主体 南方に開口する無袖の横穴式石室で、残存状態はきわめて良好でほぼ築造当初の形態を保持しているものと思われる。奥壁には幅約1m・高さ約60cmの大形の石を鏡石として横口縦積みで据え付けている。東側壁の基底石7石のうち両端とまん中の3石は小口縦積みで他は横口縦積みである。西側壁の基底石も両端の石が小口縦積みで他の石は横口縦積みである。二段目以上はやや持ち送り気味に、横口横積み・小口横積みを併用して積み上げており、石室頂部は平坦になっている。

遺物 原位置を保った遺物は出土しなかった。須恵器杯身(68)は石室内の埋土から、台付長頸壺(69)は墳丘南裾部から出土している。

小結 石室が破壊をまぬがれば旧状を保っているとするなら、石室頂部が平坦なのはこの面で天井が架構されたからだと考えられる。ただ、天井に石材を架構したとすると周溝からの比高が大きくなりすぎるので、天井材として板材が使用された可能性もある。

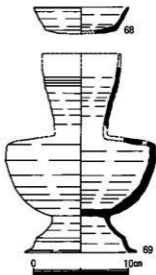


図15 13号墳出土土器

## 10 醜翻15号墳

墳丘 封土・周溝は検出されなかった。ただ、石室が楕円形より上へでることから、もとは封土があった可能性が考えられる。

内部主体 南方が開口した小石室である。一部石材が2段残っている箇所があるがほとんど基底石のみの残存である。西側壁の開口部と奥壁沿いの石と東側壁開口部の石が小口縦積み、他の石は横口縦積みである。二段目の石は小口横積みを採る。

遺物 石室内からは遺物は1片も出土していない。

小結 この古墳では石室の床面で炭の層が検出されている。これは同時期の兵庫県宝塚市雲雀山中古墳群、同じ山科盆地にある旭山古墳群にもみられる現象である。

## 11 醜翻16号墳

墳丘 封土はすでに流出し、周溝も検出できなかった。

内部主体 南に開口した小石室で、閉塞石を有する。基底石はほとんど横口横積みであ

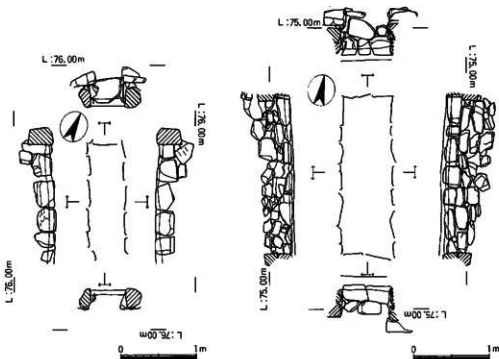


図16 15号墳石室実測図

図17 16号墳石室実測図

るが、東側壁と奥壁の一部で横口縦積みが用いられる。二段目からは横口横積みと小口横積みを併用しているが、東側壁が大きさの揃った石を用いて比較的整然と積まれているが西側壁は石材の大きさも揃わず雑然とし、石と石の合端も大きい。

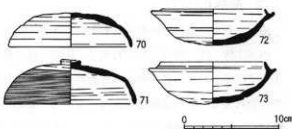


図18 17号墳出土土器

遺物 遺物は1点も出土していない。

小結 16号墳の石室は小石室としては比較的大形で、無袖の横穴式石室との中間的形態だと考えられる。

## 12 醍醐17号墳

墳丘 封土は完全に削り取られ、墳丘の前面も竹林造成時に破壊されてしまっている。しかし、東北隅で周溝の一部が検出されており、それが11号墳の西側周溝と合流しており11号墳の西側周溝を共有した方墳だと思われる。

内部主体 封土が完全に削平されているために、南方に開口したコの字形の掘形を検出することができた。石材はほとんど抜き取られていたが、わづかに東側壁の奥壁から2石目の基底石が原位置を保って検出された。また、石材の抜き取り穴を奥壁で3石分、東側壁で7石分、西側壁では原位置を保った基底石を含めて5石分確認することができた。それによると両側壁間は1.2~1.3mとなる。

遺物 破壊墳ではあるが出土遺物の量は比較的多い。奥壁沿いで鉄製の鎌・鉋・刀子・鎌・金環・銀環が各一点づつ出土している。石室中央部で金環2個・銀環・鉄製刀子が各一点、開口部で須恵器の杯身(72・73)・高杯の蓋(71)・鉄製鎌・金環が出土している。掘形の埋土から須恵器の杯蓋(70)が出土し、その掘形内埋土を切って造られた土壕内から黒色土器Aタイプの椀が出土している。

小結 石室がほぼ完全に破壊されていたが、基底石の抜き取り穴から石室の形状と規模を想定することができた。東西両側壁の抜き取り穴の間が約1.2~1.3m、東側壁の抜き取り穴が7石分約3.3mの間ほぼ一直線に並ぶことから、幅1.2~1.3m・長さ3.3m以上の無袖の横穴式石室であったと思われる。また、石材を抜き取った後に掘形内に堆積した土層を切った土壕から黒色土器が出土したことから、古墳の破壊はかなり早い時期だと考えられる。



### 13 醍醐18号墳

墳丘 石室の石材が楕形よりも上につき出すので本来は封土があったと考えられる。

内部主体 南に開口した小石室で、床面全体に板状の割石を敷いている。石室の南側は1石で閉塞されているが外方へたおれて傾いている。平面形は不整形で西側壁は中央が外方へひろがるいわゆる胴張りとなっている。基底石は、奥壁は横口縦積み、東側壁は横口横積み、西側壁は奥壁に接する石は小口縦積み他は横口縦積みになっている。二段目からは横口横積みを用いている。

遺物 遺物は1点も出土していない。

小結 本古墳は醍醐古墳群中で一番小形の石室であるが、これも成人葬だと思われる。小石室そのものが横穴式石室の系譜を引くものであるから、小児葬として考えるより自然である。

### 14 醍醐19号墳

墳丘 封土はすでに流出している。

内部主体 西壁の一部と南壁の基底石を残す小石室である。横口縦積みと小口縦積みを用いる。

遺物 石室中央部より銀環が2個出土している。

小結 醍醐古墳群の他の小石室がまったく遺物を出土しないが、本古墳は破壊墳ではあるが銀環を2個検出した。

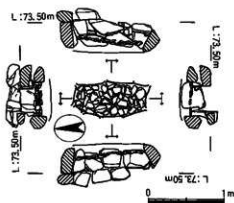


図19 18号墳石室実測図

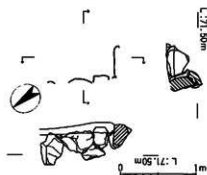


図20 19号墳石室実測図

### 15 醍醐20号墳

墳丘 南方を除く3方に周溝がめぐる方形墳である。封土はほとんど流出したような状態であったが、築造当初からそんなに盛土していなかったとも考えられる。

内部主体 南に開口する小形の無袖の横穴式石室である。基底石は小口縦積みにし、二段目からは小口横積み・横口横積みを併用しているが石と石のすきまが大きく、土で間を充填している。また、西側壁の開口部から2石分外護列石が認められた。

遺物 石室開口部近くで須恵器の杯蓋(74・75)が並んで出土している。宝珠つまみを持つ杯蓋であるが、出土時つまみはなく意識的にとりはずして杯身として使ったものと考えられる。

小結 13号墳とともに醍醐古墳群中で一番西端の小支群をつくる。

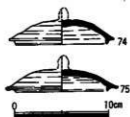


図21 20号墳出土土器

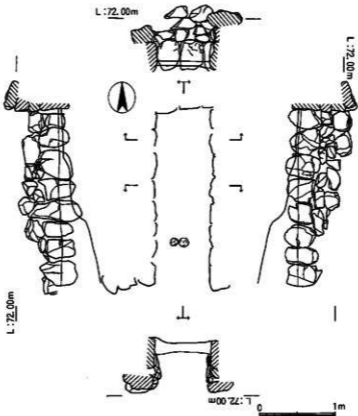


図22 20号墳石室実測図

## 第3章 まとめ

### 1 調査の結果

今回の調査では、醍醐古墳群20基中14基を対象として実施したため、この古墳群の全容をほぼ明らかにすることができた。以下に明らかになった点を述べる。

**墳丘** 墳丘が確認できたものはすべて方形を呈する。斜面につくられているため、後方に等高線に沿って溝を設けその両端にほぼ直角に溝を取り付けることによって方形の区画を得ている。比較的急斜面に造られているため墳丘は両側が前後より長い長方形を呈する。また、あまり盛土がなされていなくても斜面下より墳丘を望むと高く感じられる。

**内部主体** 内部主体には、両袖の横穴式石室・片袖の横穴式石室・無袖の横穴式石室・小石室があり、横穴式石室のすべての形態が存在する。しかし、小石室を除けば、いづれも玄室部の長さにそれ程相違はない。また、いづれの内部主体をとっても11号墳以外は単葬墓だと考えられる。11号墳は棺台として使用された石の配置・遺物の出土状況からみて2体が石室主軸方向に平行に合葬されていたものと思われる。

次に、墳丘の傾きと石室主軸方向にずれを生じる古墳が多く、著しいものは墳丘の対角線上に石室がおさまるものがある。これは、比較的急傾斜の限られた面積内に石室をおさめなければならないからで、傾斜の緩やかな地点につくられている13・20号墳は墳丘の傾きと石室主軸方向はほぼ平行である。

**遺物** 古墳に副葬されているのはほとんど須恵器で他に鉄・鍔・刀子などの鉄製品、金・銀環で、一つの古墳に副葬されている量も比較的多い。須恵器の器形は豊富で蓋杯・高杯・平瓶・提瓶・罍・器台・(台付)長頸壺・短頸壺・無頸壺などがある。しかし、これらの土器には時期差は認められず、7世紀の第一四半紀の時期が与えられる。

### 2 まとめ

醍醐古墳群は方墳を主体とした古墳群で、内部主体は横穴式石室のすべての形態を採る。築造年代は7世紀の第一四半紀である。本古墳群とよく似た古墳群と同じ山科の地にある旭山古墳群が知られているが、本古墳の方が内部主体が大形で種類も豊富、副葬品も豊富であったりして古い形態を残すなどの相違点も多い。今後、7世紀前半の終末期古墳群を考察していくうえで、本古墳群は貴重な資料となるであろう。

表1 調査古墳一覧表

古墳名	墳 丘	主 体 部	出土遺物 (主体部)	備 考
3号墳	方墳 東西幅約8.7m 周溝	小石室 長1.7m、幅0.45~0.3m N2°W	なし	
4号墳			須恵器2 (有蓋高杯、同蓋) 金環1	破壊墳
8号墳	方墳 東西幅約6.0m 周溝	横穴式石室 (無袖) 敷石・閉塞石 長3.5m 以上幅0.7~0.9m N33°E	須恵器10 (杯3、杯蓋3、長頸壺 1、台付長頸壺1、無蓋壺1、 無蓋高杯1) 鉄器1	
9号墳	方墳 東西幅約6.0m 周溝	横穴式石室 (無袖) 棺台石 長4.9m 以上幅0.8m~0.9m N6°E	須恵器8 (杯3、杯蓋2、短頸壺 1、平瓶2)	
10号墳	方墳 東西幅約10.0m 周溝	横穴式石室 (片袖) 棺台石 全長3.7m 以上、支室長2.47m、 幅1.3m 羨道幅1.07m N13°E	須恵器10 (杯3、杯蓋3、有蓋高 杯1、無蓋高杯1、提瓶1、平瓶 1) 鉄釘3、金環3、不明鉄器 1。	7世紀後半に再利用
11号墳	方墳 東西幅約12.5m 周溝	横穴式石室 (両袖) 棺台石 全長5.0m 以上、支室長2.5m、 幅1.5m、羨道幅1.3m N30°E	須恵器12 (杯3、杯蓋5、長頸壺 1、台付長頸壺2、無蓋高杯1) 鉄釘9、鏡先1、銀環4	7世紀後半に再利用 (鉄釘は再利用時のもの)
12号墳	方墳 東西幅約10.0m 周溝	横穴式石室 (無袖) 棺台石 長2.7m 以上幅1.3m N1°W	須恵器5 (杯1、台付長頸壺1、 無蓋高杯1、高杯蓋1、提瓶1) 銀環4	
13号墳	方墳 東西幅約4.6m 周溝	横穴式石室 (無袖) 長3.75m 幅0.94~1.04m N15°E		
15号墳		小石室 長1.1m 幅0.5m N26°W		床面に炭層
16号墳		小石室 長2.06m 幅 N11°W		
17号墳	方墳 東西幅約10.0m 周溝	横穴式石室 (無袖) 全長3.5m 以上幅1.4m N1°E	須恵器3 (杯2、高杯蓋1) 鉄器 2、刀子1、鎌1、鎧1、金銀環 6。	抜き取り穴から復元
18号墳		小石室 敷石 長0.94m 幅0.28~0.45m N4°E		
19号墳		小石室 全長0.6m 以上 幅0.35m 以上 N38°E	銀環2	
20号墳	方墳 東西幅約3.5m	横穴式石室 (無袖) 長2.4m 幅0.7m N1°E	須恵器2 (杯蓋2)	

表2 土器(須恵器)観察表

土器番号	出土古墳	器形	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	4号墳	高杯蓋	○天井部は高く丸味を帯びる。 ○天井部中央に中くぼみのつまみをもつ。	○天井部ヘラケズリ。 ○天井部内面仕上げナデ。 ○他は回転ナデによる調整。	○焼成良好。 ○径2~3mmの長石粒を含む。 ○灰白色を呈す。
2	4号墳	有蓋高杯	○杯部立ち上りは、低く内傾する。 ○杯は浅く、偏平。 ○脚は杯部からラップ状にひろがり、脚端は断面三角形を呈す。 ○2段2方向に通し。	○杯底部、ヘラケズリの後、回転ナデ。 ○脚上半部、粗いカキ目調整。 ○他は回転ナデによる調整。	○焼成良好。 ○長石、石英粒を含む。 ○淡青灰色を呈す。
3~5	8号墳	杯蓋	○天井部と口縁部の境が不明瞭。 ○口縁端部は短く直立し、丸味をおびる。	○天井頂部ヘラケズリ ○他は回転ナデによる調整。 ○5の天井部内面に同心円の印き。	○焼成良好。 ○径3~5mmの長石粒等の砂粒を含む。 ○暗青灰色を呈す。
6~8	8号墳	杯身	○器高が低くて偏平。 ○立ち上りは低く内傾する。 ○受部は狭く、肩部は丸味をおびる。	○底部ヘラケズリ ○他は回転ナデによる調整。	○焼成良好。 ○径2~3mmの砂粒を多く含む。 ○青灰色を呈す。
9	8号墳	短頸壺	○口縁部は短く直立し、端部は丸味をおびる。 ○胴部は球形を呈す。	○底部ヘラケズリ。 ○胴部上半、粗いカキ目調整。 ○他は回転ナデによる調整。	○焼成良好。 ○胎土精良。 ○底部に「H」のヘラ記号。 ○青灰色を呈す。
10	8号墳	無頸壺	○最大径は胴部中央よりやや上になる。 ○器壁は厚く、ぼてっとしている。	○胴部下半底部、ヘラケズリの後、カキ目調整。 ○他は回転ナデによる調整。	○焼成良好。 ○径1~2mmの砂粒を多く含む。 ○暗青灰色を呈す。
11	8号墳	無蓋高杯	○杯の体部・口縁部は外上方へのびる。 ○杯の体部と底部の境に一条の沈線。 ○脚部はラップ状にひろがり、脚端は断面三角形を呈す。 ○2段2方向に通し。	○杯内底面仕上げナデ。 ○他は回転ナデによる調整。	○焼成良好。 ○径1mm前後の砂粒を含む。 ○ひずみが大きく、杯部は三角形を呈す。 ○青灰色であるが、焼成時に火を強く受けて灰黒色を呈する部分が多い。
12	8号墳	台付長頸壺	○口頸部は外上方へひらき、端部は若干内傾する。 ○胴部の肩部に2条の沈線 ○胴部はほぼ球形で中央よりやや	○胴部下半ヘラケズリ ○他は回転ナデによる調整。	○焼成良好。 ○径1~3mmの砂粒を多く含む。 ○暗青灰色を呈す。

			上で最大径となる。 ○脚部を欠くが透しは3方にあく。		
13	8号墳	長頸壺	○口頸部は外上方へひらき、肩部は若干内傾する。 ○頸部中央やや上に2条の沈線。 ○平坦な底部をもつ。 ○肩部に2条の沈線。	○底部はヘラケズリ。 ○頸部はカキ目調整。 ○他は回転ナデによる調整。	○焼成良好。 ○胎土精良。 ○青灰色を呈す。
14・15	9号墳	杯蓋	○天井部と体部の境は割と明瞭。	○天井頂部へラ切りのまま無調整。 ○天井部内面仕上げナデ。 ○他は回転ナデによる調整を施しているが、口縁部のみ右上りのナデ調整を施す。	○焼成はあまりよくない。 ○径2～3mmの砂粒を若干含む。 ○灰白色を呈す。
16・17・19	9号墳	杯身	○器高が低くて扁平。 ○立ち上りは低く内傾する。 ○受け部は短かく外上方へのびる。	○底部はヘラ切りのまま無調整。 ○内底面仕上げナデ。 ○他は回転ナデによる調整。	○焼成不良。 ○径2～3mmの砂粒を含む。 ○灰白色を呈す。
18	9号墳	杯身	○比較的底部と体部の境は明瞭。 ○立ち上りは短く、断面三角形を呈す。	○底部ヘラケズリ。 ○他は回転ナデによる調整。	○焼成良好。 ○胎土精良。 ○青灰色を呈す。
20	9号墳	短頸壺	○頸部直立する。 ○底部は平坦である。 ○肩部は胴部上半3分1のところがあり、直線的に底部へとつづく。	○底部ヘラケリのまま無調整。 ○他は回転ナデによる調整。	○焼成良好。 ○径1～2mmの砂粒を含む。 ○青灰色を呈す。
21・22	9号墳	平瓶	○体部上面は丸味をおび、肩部は割と明瞭な稜をもつ。 ○底部は平坦である。 ○22の体部上面には扁平な円形の粘土粒が貼付される。	○体部下半、底部はヘラケズリ。 ○体部上半は回転ナデの後、カキ目調整。 ○22は体部上半のカキ目調整は省略。	○焼成良好。 ○2～3mmの砂粒を含む。 ○青灰色を呈す。
23・24	10号墳	杯蓋	○天井部と体部の境は割と明瞭。	○天井部ヘラケズリ。 ○他は回転ナデによる調整。	○焼成良好。 ○径1～3mmの砂粒を若干含む。 ○23は青灰色、24は暗青灰色を呈す。
25	10号墳	高杯蓋	○天井部は比較的平坦で、体部との境は明瞭。 ○天井部中央に中くばみのつまみをもつ。	○天井部ヘラケズリの後、ツマミに近い部分のみカキ目調整。	○焼成良好。 ○径1～2mmの砂粒を含む。 ○青灰色を呈す。
26～28	10号墳	杯身	○底部と体部の境は割と明瞭。 ○立ち上りは低く内傾する。	○26は底部ヘラケズリ、27・28はヘラケリのまま無調整。	○26・27は焼成良好。 ○28は胎土精良、他は径

				○他は回転ナデによる調整。	2～3mmの砂粒を含む。 ○26は暗青灰色、27は青灰色、28は灰白色。
29	10号墳	無蓋高杯	○底部と体部の境に稜がある。	○内底面仕上げナデ。 ○他は回転ナデによる調整。	○焼成良好。 ○径1mm前後の砂粒を含む。 ○暗青灰色を呈す。 ○1/2復元
30・31	10号墳	有蓋高杯	○器高が低く、偏平。	○底部ヘラケズリの後、脚との接合部は回転ナデ。 ○他は回転ナデによる調整。	○31は焼成良好。 ○径1～2mmの砂粒を含む。 ○青灰色を呈す。 ○1/2復元。
32	10号墳	高杯・脚	○脚部はラッパ状にひろがり、脚端部は、下方へつまみ出す。	○回転ナデによる調整。	○焼成良好。 ○径1mm前後の砂粒を含む。 ○暗青灰色を呈す。 ○1/3復元。
33	10号墳	無蓋高杯	○低く、外方へふんばった脚をもち、脚端部は短くつまみあげる。 ○脚のほぼ中央に沈線がめぐる。 ○杯の底部と体部の境は明瞭で、体部・口縁部は外上方へ直線的にのびる。 ○杯底部にクシ状の施紋具で列点文を施す。	○回転ナデによる調整。	○焼成良好。 ○径1～2mmの砂粒を含む。 ○青灰色を呈す。
34	10号墳	有蓋高杯	○杯は低くて偏平。 ○杯部立ち上りは低く内傾。 ○脚はラッパ状にひろがり、脚端部は上下につまみ出す。 ○2段3方向に線状の透し。	○杯底部ヘラケズリの後、回転ナデ。 ○他は回転ナデによる調整。	○焼成良好。 ○径2～3mmの砂粒を含む。 ○暗青灰色を呈す。
35	10号墳	有蓋高杯	○杯は低くて偏平。 ○杯部立ち上りは低く内傾。 ○脚は大きくひろがり、脚端部は下へつまみ出す。 ○2段3方向の透しをもつ。	○杯底部はヘラケズリの後回転ナデ。 ○脚は増部を除いてカキ目調整。 ○他は回転ナデによる調整。	○焼成良好。 ○径1mm前後の砂粒を含む。 ○暗青灰色を呈す。
36	10号墳	提瓶	○胴部の前面・背面とも丸味をおびる。 ○外上方へ開く、体部に比して長い口頸部がつく。	○胴部背面ヘラケズリ。 ○他は回転ナデによる調整。	○焼成良好。 ○径2～3mmの砂粒を含む。 ○前面、灰黒色、背面青

			<p>○口頸部中央よりやや上に一条の沈線がめぐる。</p> <p>○胴部前面に5条の沈線がめぐる。</p> <p>○肩の両側に環状把手が付く。</p>		<p>灰色を呈す。</p>
37	10号墳	平瓶	<p>○体部上面は丸味をおび、体部との境は不明瞭。</p> <p>○底部は平坦。</p> <p>○体部上面に把手がつく。</p>	<p>○底部はヘラケズリ。</p> <p>○他は回転ナデによる調整。</p>	<p>○焼成良好。</p> <p>○胎土精良。</p> <p>○体部上半灰白色、他は暗青灰色を呈す。</p>
38	10号墳	甕	<p>○体部から「く」の字形に口縁部へと転曲する。</p> <p>○口縁部は外方へ肥厚する。</p>	<p>○体部格子目の叩き。</p> <p>○体部内面同心円の叩き。</p> <p>○口縁部格子目叩きの後、ナデ消し。</p> <p>○他は回転ナデによる調整。</p>	<p>○焼成良好。</p> <p>○径1～2mmの砂粒を含む。</p> <p>○青灰色を呈す。</p>
39～43	11号墳	杯壺	<p>○天井部と体部の境は割と明瞭。</p> <p>○口縁部は若干外方へひらく。</p>	<p>○40・41は天井部ヘラ切りのまま無調整、他の土部はヘラケズリ。</p> <p>○天井部内面仕上げナデ。</p> <p>○他は回転ナデによる調整。</p>	<p>○焼成良好。</p> <p>○径1～2mmの砂粒を含む。</p> <p>○39・40は灰白色、41・42は青灰色、43は灰黒色を呈す。</p>
44～48	11号墳	杯身	<p>○器高が低く、偏平。</p> <p>○立ち上りは低く内傾、46の立ちあがりは短く直立する。</p> <p>○受け部はほぼ平坦。</p>	<p>○44～46は底部ヘラ切りのまま無調整。</p> <p>○47・48は底部ヘラケズリ。</p> <p>○44・45・48は内底面は仕上げナデ。</p> <p>○他は回転ナデによる調整。</p>	<p>○焼成良好。</p> <p>○径1～2mmの砂粒を含む。</p> <p>○44・45は灰白色、46～48は青灰色を呈す。</p>
49	11号墳	無蓋高杯	<p>○杯底部と体部の境は明瞭な線をもち、屈曲し、体部・口縁部は外上方へのびる。</p> <p>○脚は杯底部との接合点では細く、外方へ開き、裾部は水平に近く外方へのび、端部は上方へつまみあげる。</p> <p>○脚、中央に2条の沈線。</p> <p>○2段2方向の透しをもつ。</p>	<p>○杯底部ヘラケズリの後、回転ナデ。</p> <p>○他は回転ナデによる調整。</p>	<p>○焼成良好。</p> <p>○径1～2mmの砂粒を含む。</p> <p>○青灰色を呈す。</p>
50	11号墳	長頸壺	<p>○頸部から体部にかけて「く」の字形に屈曲し、口頸部は直線的に外上方へのびる。</p> <p>○口縁部は若干内傾する。</p>	<p>○胴部下半はヘラケズリの後、不定方向のナデ消し。</p> <p>○口頸部と胴部中央部はカキ目調整。</p> <p>○他は回転ナデによる調整。</p>	<p>○焼成良好。</p> <p>○径2～5mmの砂粒を多く含む。</p> <p>○青灰色を呈す。</p>

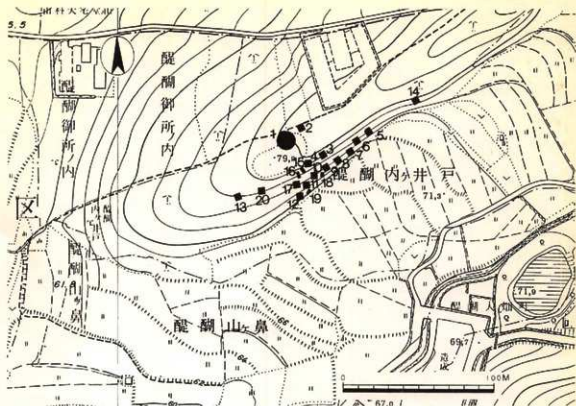


51	11号墳	器台	<p>○底部から体部・口縁部へと外弯して外上方へのびる。</p> <p>○口縁端部内側へつまみあがる。</p>	<p>○杯中央部に浅い3条の沈線をめぐるせその上下に波状紋を施す。</p> <p>○杯下半は格子印きを施す。</p> <p>○杯の内底面、同心円の印きの後、ナデ消し。</p> <p>○他は回転ナデによる調整。</p>	<p>○焼成良好。</p> <p>○径2～3mmの砂粒を含む。</p> <p>○青灰色を呈す。</p>
52	11号墳	台付長頸瓶	<p>○口頸部は直線的に外上方へのび、上より約3分の1の地点で2条の沈線がめぐる。</p> <p>○胴部の中央部に最大径がある。</p> <p>○胴部中央に2条1単位の沈線を2単位施し、その間にへら状の施紋具で右上りの刺突紋を施す。</p> <p>○脚部は一段平坦面を有して裾部へと屈曲する。</p> <p>○脚部の平坦面に一条の突帯がめぐる。</p> <p>○脚部に2方向の透し。</p>	<p>○胴部下半へラケズリ。</p> <p>○他は回転ナデによる調整。</p>	<p>○焼成はよい方だが、もろい。</p> <p>○径2～3mmの砂粒を若干含む。</p> <p>○赤褐色を呈す。</p>
53	11号墳	台付長頸瓶	<p>○ラッパ状にひろく口頸部をもち、上より約3分の1の地点に2条の沈線を施す。</p> <p>○胴部中央に2条1単位の沈線を2単位施し、その間にへら状の施紋具で右上りの刺突文を施す。</p> <p>○脚は短く外方へひろがる。</p>	<p>○胴部下半へラケズリ。</p> <p>○胴部の底部内面に同心円の印き。</p> <p>○他は回転ナデによる調整。</p>	<p>○焼成良好。</p> <p>○径2～5mmの砂粒を含む。</p> <p>○青灰色を呈す。</p>
54～59	12号墳	杯身	<p>○器高低く偏平。</p> <p>○立ち上りは低く内傾する。</p>	<p>○底部へラケズリ。</p> <p>○55・56～58は内底面仕上げナデ。</p> <p>○他は回転ナデによる調整。</p>	<p>○焼成良好。</p> <p>○径2～3mmの砂粒を含む。</p> <p>○54・59は灰白色、他は青灰色を呈す。</p>
60・64	12号墳	有蓋高杯	<p>○杯は浅く偏平で、立ち上りは低く内傾する。</p> <p>○脚は杯部からラッパ状にひろがり、脚端は断面三角形を呈する。</p> <p>○脚中央部に2条の沈線。</p> <p>○2段2方向に透し。</p>	<p>○杯の体部底部へラケズリ。</p> <p>○64は脚部上半カキ目調整。</p> <p>○他は回転ナデによる調整。</p>	<p>○焼成良好。</p> <p>○60は径1mm前後の砂粒、64は径3～5mmの砂粒を含む。</p> <p>○青灰色を呈す。</p>
61	12号墳	無蓋高杯	<p>○底部から屈曲して体部・口縁部へと外上方へのびる。</p> <p>○体部中央に2条の沈線がめぐる。</p>	<p>○底部へラケズリ。</p> <p>○他は回転ナデによる調整。</p>	<p>○焼成良好。</p> <p>○径1mm前後の砂粒を含む。</p> <p>○青灰色を呈す。</p>

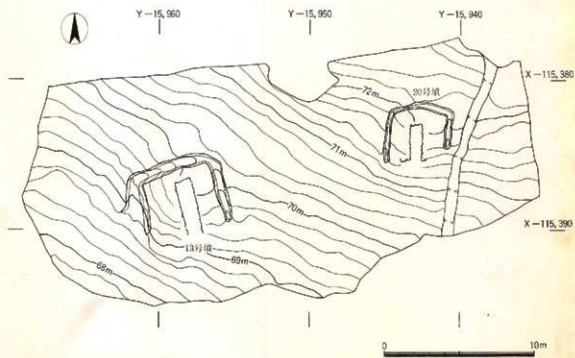
62	12号墳	無蓋高杯	<p>○杯底部と体部の境は明瞭な線を もって屈曲し、体部・口縁部は 外上方へのびる。</p> <p>○脚は杯底部との接合点では細く、 外方へのびる。</p> <p>○脚中央に2条の沈線がめぐる。</p> <p>○2段2方向の通し。</p>	<p>○回転ナデによる調整。</p>	<p>○焼成良好。</p> <p>○1mm前後の砂粒を含む。</p> <p>○青灰色を呈す。</p>
63	12号墳	高杯蓋	<p>○天井部は丸味をおびる。</p> <p>○天井部中央に中くぼみのつまみ をもつ。</p>	<p>○天井部ヘラケズリ。</p> <p>○他は回転ナデによる調整。</p>	<p>○焼成良好。</p> <p>○径3～5mmの砂粒を含 む。</p>
65	12号墳	匙	<p>○細い頸部をもち、口頸部は外上 方へひろがる。</p> <p>○頸部と口縁部の境に稜がある。</p> <p>○胴部の釘は1条の沈線がめぐり、 その下に稜を有する。</p>	<p>○胴部下半、底部ヘラケズリ。</p> <p>○他は回転ナデによる調整。</p>	<p>○焼成良好。</p> <p>○径1mm前後の砂粒を含 む。</p> <p>○淡灰色を呈す。</p>
66	12号墳	提 瓶	<p>○胴部の前面は丸味をおびるが、 背面は平折である。</p> <p>○口頸部は外弯して上方へのび、 口縁部は内傾する。</p> <p>○釘の両面に環状の把手がつく。</p>	<p>○胴部背面ヘラケズリ。</p> <p>○他は回転ナデによる調整。</p>	<p>○焼成良好。</p> <p>○径1mm前後の砂粒を含 む。</p> <p>○暗青灰色を呈す。</p>
67	12号墳	方付長頸蓋	<p>○口頸部は直線的に外上方へのび、 中央部やや上に2条の沈線がめ ぐる。</p> <p>○胴部の釘部に2条の沈線。その 下に1条の沈線がめぐり、その 間にヘラ状の捺紋具で右上りの 割突紋を施す。</p> <p>○脚部は一段平折面を有して基部 へと屈曲する。</p> <p>○脚部に2方向の通し。</p> <p>○脚部中央に2条の沈線がめぐる。</p>	<p>○胴部下半ヘラケズリ。</p> <p>○他は回転ナデによる調整。</p>	<p>○焼成はよくない。</p> <p>○径1～2mmの砂粒を含 む。</p> <p>○灰白色を呈す。</p>
68	12号墳	杯 身	<p>○底部から屈曲して、体部・口縁 部は直線的に外上方へのびる。</p>	<p>○底部ヘラケズリ。</p> <p>○他は回転ナデによる調整。</p>	<p>○焼成不良。</p> <p>○径1～2mmの砂粒を含 む。</p> <p>○灰白色を呈す。</p>
69	12号墳	方付長頸蓋	<p>○口頸部は外弯気味に外上方への び、中央部やや上に2条の沈線 がめぐる。</p> <p>○胴部の割がより、上面はほぼ平 折になる。</p>	<p>○胴部下半ヘラケズリ。</p> <p>○他は回転ナデによる調整。</p>	<p>○焼成良好。</p> <p>○胎土精良。</p> <p>○赤褐色を呈する。</p>

			<p>○脚部は中央で逆「く」の字形に屈曲し裾はひろがる。脚端部は外方へ張り出す。</p> <p>○脚中央部、屈曲部直下に1条の沈線がめぐる。</p>		
70	17号墳	杯蓋	<p>○天井部と体部の境は割と明瞭。</p>	<p>○天井部、ヘラ切りそのまま無調整。</p> <p>○他は回転ナデによる調整。</p>	<p>○焼成良好。</p> <p>○長石を若干含む。</p> <p>○淡青灰色を呈す。</p>
71	17号墳	高杯蓋	<p>○天井部と体部の境は割と明瞭。</p> <p>○天井部は丸味をおび、天井部中央に中くぼみのつまみがつく。</p> <p>○天井部と体部の境に1条の沈線がめぐる。</p>	<p>○天井部ヘラケズリ。</p> <p>○体部・口縁部カキ目調整。</p> <p>○他は回転ナデによる調整。</p>	<p>○焼成良好。</p> <p>○長石・石英粒を若干含む。</p> <p>○天井部にカナネ線の痕跡。</p> <p>○灰黑色を呈す。</p>
72・73	17号墳	杯身	<p>○身が割と深い。</p> <p>○立ち上りは短い、内上方へへびる。</p>	<p>○底部ヘラケズリ。</p> <p>○内底面仕上げナデ。</p> <p>○他は回転ナデによる調整。</p>	<p>○焼成良好。</p> <p>○長石粒との砂粒多く含む。</p> <p>○淡青灰色を呈す。</p>
74・75	20号墳	杯蓋	<p>○天井部と体部の境は不明瞭。</p> <p>○口縁端部は外方へひらき、丸味をおびる。</p> <p>○かえりは口縁端部より下方へ突出する。</p> <p>○宝珠つまみをもつ器形であるが、欠損している。</p>	<p>○天井部ヘラケズリ。</p> <p>○天井部内面仕上げナデ。</p> <p>○他は回転ナデによる調整。</p>	<p>○焼成良好。</p> <p>○径1mm前後の砂粒を含む。</p> <p>○青灰色を呈す。</p>

## 图 版

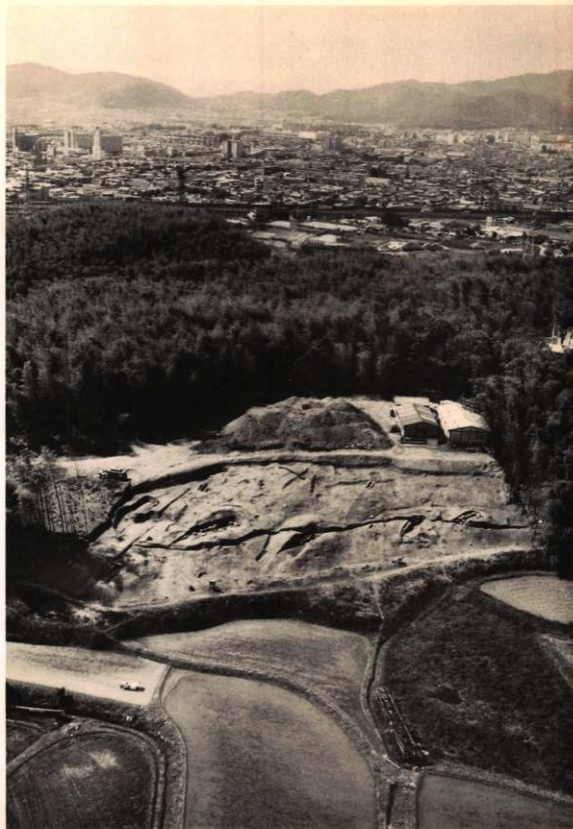


1 醍醐古墳群分布図 (1:2500)



2 西拉張区地形測量図 (1:250)





調査地遠景 (南より)



1 調査地遠景（東より）



2 西拉張区全景（北東より）





1 3号墳全景 (南東より)



2 4号墳全景 (南より)



1 8号墳全景 (西より)



2 9号墳全景 (南より)



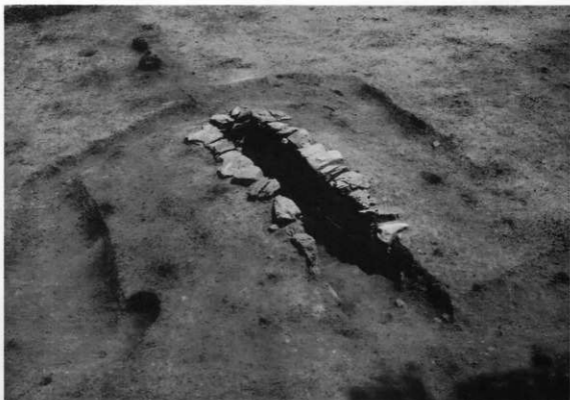
1 10号墳全景 (南より)



2 11号墳全景 (南西より)



1 12号墳全景 (南より)



2 13号墳全景 (南西より)



1 17号墳全景 (南より)



2 20号墳全景 (南より)



1 15号墳全景 (南東より)



2 16号墳全景 (南より)



3 18号墳全景 (南より)



4 19号墳全景 (北東より)



8号墳出土土器



23



24



25



33



34



26



27



28



37



36

10号墳出土土器

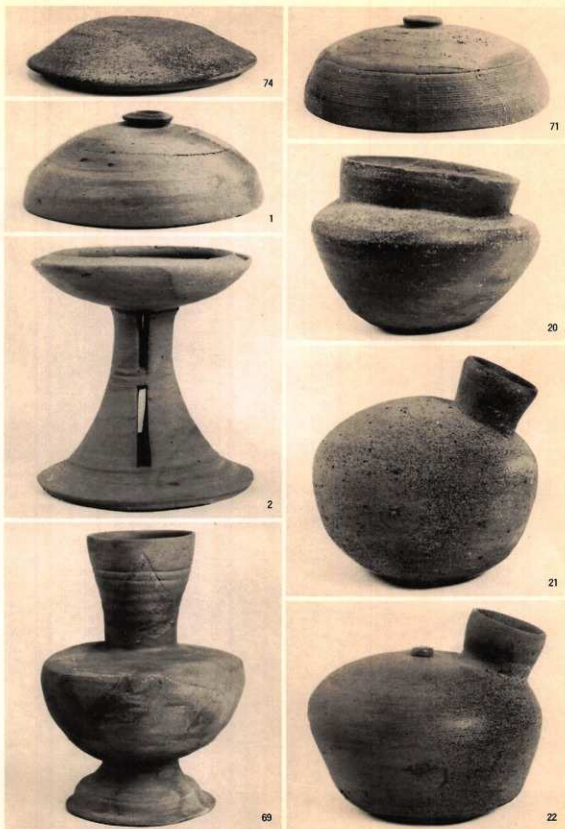




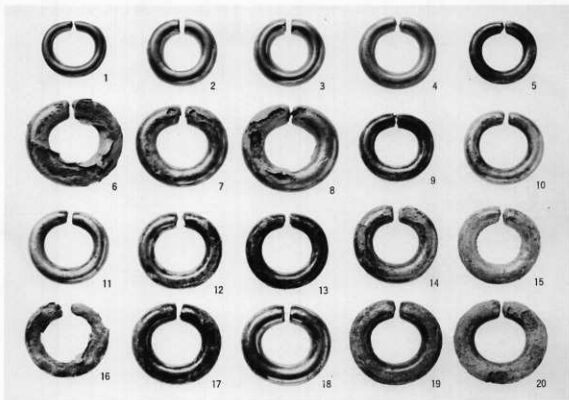
11号墳出土土器



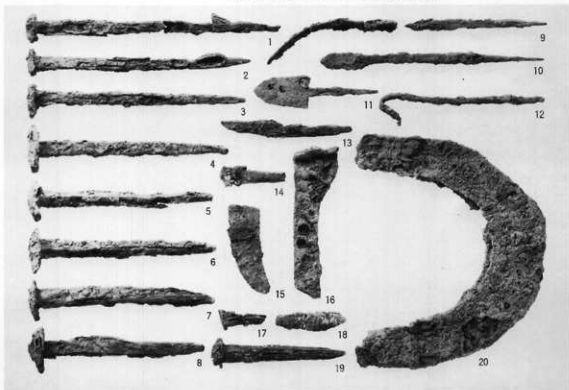
12号墳出土土器



4号墳出土土器 (1,2), 9号墳出土土器 (20~22), 13号墳出土土器 (69)  
17号墳出土土器 (71), 20号墳出土土器 (74)



1 金環(1~4·6~8)・銀環(5·9~20)：10号墳 (2·3·12)，11号墳 (10·11·14·16)，12号墳 (5·9·19·20)  
17号墳 (1·6~8·13·15)，19号墳 (17·18)



2 鉄製品：8号墳 (10)，10号墳 (16~19)，11号墳 (1~8·20)，17号墳 (9·11~15)

## 醍醐古墳群発掘調査概報

昭和60年度

発行日 昭和61年3月31日

発行 京都市文化観光局

住所 京都市左京区岡崎最勝寺町13京都会館内

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川大宮東入ル元伊佐町

TEL (075) 415-0521

印刷 真 陽 社